

2024年8月4日（日）「香に包まれて昇る祈り」

ヨハネの黙示録 8:1-5

1 小羊が第七の封印を解いたとき、天は半時間ほど静寂に包まれた。2 そして私は、七人の天使が神の前に立っているのを見た。彼らには七つのラツパが与えられた。3 また、もう一人の天使が来て、金の香炉を手を持って祭壇のそばに立ち、たくさんの香を受け取った。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇の上に献げるためである。4 香の煙は、聖なる者たちの祈りと共に天使の手から神の前に立ち上った。5 それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷鳴、轟音、稲妻、地震が起こった。

【序論】

「祈りは本当に聞かれているのだろうか」。これは、信仰生活を営む者なら誰しも直面したことのある問いでしょう。祈りに対する答えがなかなか得られないとき、自分の祈りには力がないのではないか、それともそもそも祈りは聞かれていないのではないか、そのような疑念を抱きやすいものです。敢えてそれを言葉にしなくとも、心のどこかで信じ切れていない自分がいるかもしれません。祈りが力あるものとなるためには、もちろん確信が必要です。信じないで祈るほど、祈りからは力が失われていく。「信じられない→答えられない→祈らない」という負のループに嵌まり込まないようにしたい。神がどのように祈りに答えてくださるのか、その方法が単一的ではないということも留意しておく必要があるでしょう。すぐに答えが与えられることもあれば、長い時間を要するものもあり、私たちが生きている間には実現しないものもあるかもしれません。いずれにしても、すべての祈りは聞かれているということを忘れずに、神の御前で責任ある言葉を発するものでありたいのです。

【本論】

本論 1. 第七の封印、七人の天使、七つのラツパ

「幕間劇」としての7章を挟んで、8章では6章から来る「第七の封印」が開かれます。

小羊が第七の封印を解いたとき、天は半時間ほど静寂に包まれた。(8:1)

最後の封印となりますが、これが解かれたときに「天は半時間ほど静寂に包まれた」と言われています。「嵐の前の静けさ」ということわざがありますが、この後大きな事件が起きてくることを予感させる不気味な静寂です。「半時間」とは、それほど長くはない空白の時間を表し、最後の審判に先立つ最終的な猶予の時と捉えてもよいでしょう。旧約預言書の数箇所においても、神の審きが行なわれる前に全地は静まりかえると述べられています。

- ・ しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、主の前に沈黙せよ。(ハバクク 2:20)
- ・ 主なる神の前に静まれ。主の日は近づいているからだ。(ゼパニヤ 1:7)

私たちも神からの答えを聞くためには静まる必要がある。

そして私は、七人の天使が神の前に立っているのを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。(8:2)

1～2節にかけて立て続けに「七」という数字が三回も出てきます。「第七の封印」「七人の天使」「七つのラッパ」と。小羊イエスによる審きの絶対性がここに表されているのでしょうか。七人の天使に与えられたラッパは、神の救いを受け入れない人々に対する一連の審きを表していますが、それは7節以下で明らかになり、10章の終わりまで続きます。

- ①血の混じった雹と火による審き (8:7)
- ②火の燃え盛る大きな山のようなものによる審き (8:8-9)
- ③松明のように燃えている大きな星による審き (8:10-11)
- ④太陽、月、星が撃たれる審き (8:12)
- ⑤一つの星が天から地上に落ちる審き／ばったによる審き (9:1-11)
- ⑥二億の騎兵による審き (9:13-21)
- ⑦神の秘義の成就 (10:7)

本論2. 立ち上る香の煙

また、もう一人の天使が来て、金の香炉を手に持って祭壇のそばに立ち、たくさんの香を受け取った。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇の上に献げるためである。(8:3)

七つのラッパの天使に先立って、「もう一人の天使」が現れます。この天使は「金の香炉」を手に持っているのですが、香炉というのはお香を中に入れて煙を出すためのもので、金属製からセラミック製まで様々なタイプがあります。この天使は、香炉に入れるための「たくさんの香」を受け取りましたが、その香の煙の中に「聖なる者たちの祈り」が含まれ、神の許へと立ち昇らせていくようです。祈りの内容は記されていませんが、話の流れではその祈りが神に聞き届けられて地への審きが始まっていきますから、地において聖徒たちを苦しめた者に対する神の復讐を求める祈りなのでしょう。この祈りは6:10でささげられたものであると思われます。

彼らは大声でこう叫んだ。「聖なるまことの主よ、あなたはいつまで裁きを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」(6:10)

この切実な叫びはすぐに応えられたわけではなく、神が審きを行なわれる時が来るのを待つように諭されています。

すると、彼らの一人一人に白い衣が与えられ、それから、「あなたがたと同じように殺されようとしているきょうだいであり、同じ僕である者の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでるように」と告げられた。(6:11)

私たちは問題に直面したとき、その解決を求めて祈るでしょう。地上では残忍な出来事が多く、無実の罪を着せられて命を絶たれる人も多くいます。その浮かばれない最期に報いてく

ださる神がおられることを信じ、最後の頼みの綱として祈りをささげる。復讐を神の御手に委ねた人々はその時の訪れを待ちますが、それは彼らの死後に成就することが多いのです。

香の煙は、聖なる者たちの祈りと共に天使の手から神の前に立ち上った。(8:4)

祈りは聞かれていないようで聞かれている。祈るときには、自分の祈りが香の煙に包まれて神の許へと運ばれていくイメージを持つことが大切です。神の定めの際にその祈りに対する答えが与えられるのです。

本論3. 応答の裁き

それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷鳴、轟音、稲妻、地震が起こった。(8:5)

天使の行動に要注目です。聖徒たちの祈りが一杯に詰められた香炉に祭壇の火を満たし、それを「地上へ投げつけた」というのです。「祭壇の火」とは、神の審きの火。一つひとつの祈りに対する神の応答がその香炉に詰め込まれたのです。そして、それが天使の手によって地に投げ込まれる。すると、「雷鳴、轟音、稲妻、地震」が起こりました。これらはこれから七つのラッパが吹き鳴らされていくときに、より大規模に実現していく審きの序章にすぎません。この天使による一投を合図として、ラッパを持った七人の天使が行動を開始するのです。ヴェルディの《レクイエム》より「怒りの日」の歌詞をここにご紹介します。

その日は 怒りの日

その日は 世界が灰燼に帰す日です
ダビデとシビラの預言のとおり

その恐ろしさはどれほどでしょうか
すべてが厳しく裁かれるとき
奇しきラッパの響きが

各地の墓から
すべての者を玉座の前に集めるでしょう

死も自然も驚くでしょう
つくられた者が
裁く者に弁明するためによみがえる時

死も驚くでしょう
書物がさしだされるでしょう

すべてが書き記された

この世を裁く書物が

そして審判者がその座に着くとき
隠されていたことがすべて明らかにされ
罪を逃れるものはありません

その日は 怒りの日

その日は 世界が灰燼に帰す日です
ダビデとシビラの預言のとおり

その時
哀れな私は何を言えば良いのでしょうか
誰に弁護を頼めば良いのでしょうか
正しい人ですら不安に思うその時に

【結論】

この歌詞の中でも言われているように、神に敵対する者を訴える聖徒でさえ、最後の審判の日には自らの人生全体を振り返って恐れ慄くことでしょう。神の御前に正しく歩み抜くことのできる人は一人もいないからです。しかし、私たちはイエス・キリストの救いを受け入れ、この方を弁護者として持っています。そのような立場を得た者として祈りをささげているのです。神の義が貫徹されるように、私たちの訴えに耳を傾けてくださるように、と。その祈りは香の煙に包まれ、大切に神の祭壇の許で保管されているのです。

【祈り】

祈りに耳を傾け給う主よ。私たちは祈りをささげるとき、本当にこの祈りは聞かれているのだろうかや疑問を抱くことがあります。疑えば疑うほど祈りには力が失われていきます。信じてやまない信仰を与えてください。祈りが悪循環に陥ることなく、それが叶えられているのを見続ける好循環の人生を歩むことができますように。そして、この地上で答えを見ることのない祈りも、あなたの御手に全く委ねることができるようお助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
聖徒の祈りを「金の香炉の煙」として受け留め給う、父なる神の愛、
祈りのことばに確信を与え、その答えを見出させ給う、主イエス・キリストの恵み、
地上の生涯で叶えられぬ祈りも、主の御手に全く委ねさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。